

番組審議会

第691回

2025年3月17日

■ 審議会の構成

出席委員数 10名
委員長 音 好 宏
副委員長 江 澤 佐知子
委 員 尾 縣 貢 萱 野 稔 人
喜田村 洋 一 田 中 東 子
洞 口 依 子 長 嶋 有
水無田 気 流 目加田 説 子

TBSテレビ 龍 宝 社 長
合 田 専 務
井 上 取締役
三 城 コンテンツ戦略局長
荒 井 報道局長
延 廣 報道局 編集部 統括編集長
揖 斐 報道局 「Nスタ」筆頭編集長
藤 田 編成考査局長
浜 崎 カスタマーサクセス室長
満 田 番組審議会事務局

■ 議事概要

1. 審議事項

(1) 震災報道番組

① 「Nスタスペシャル～能登地震1年

能登に生きる、未来へつなぐ～」

1月1日（水）16：00～16：40放送

② 「Nスタ 東日本大震災14年 つなぐ、つながる」

3月11日（火）放送分のうち

15:49～17:00、17:51～18:08

(2) その他

2. 報告事項

(1) 2025年度上期の編成方針

(2) 「TBSグループ 人権WEEK2025」について

3. 事務局報告事項

(1) 視聴者からの声

(2) 次回審議会の議題及び日程

【審議番組について】

① 「Nスタスペシャル～能登地震1年 能登に生きる、未来へつなぐ～」

能登地震から1年の今年1月1日、地震発生時刻の午後4時10分に合わせて放送。ホラン千秋・井上貴博の両キャスターが能登の年越し取材、「能登の今」を生中継。能登の暮らしを未来に繋ごうとする人々の姿を伝えた。

② 「Nスタ 東日本大震災14年 つなぐ、つながる」

3月11日、「Nスタ」レギュラー放送の枠で放送。東日本大震災から14年、大震災の被害を知らない子どもたちも増えている。今年は「いのちを守る」をテーマに「地震や津波の脅威」を改めて伝えること、大地震から「どう命を守るか」にこだわって特集を組んだ。

【委員の主な意見】

<①「Nスタスペシャル～能登地震1年」について>

- 我々は自然災害と背中合わせに生きているのだと再認識、実感させられた。雨の中の黙祷の映像を見ているだけでこちらに訴えかけてくるものがあった
- メインキャスター2人、多くのスタッフが1月1日に現地から生中継をするという訴求力、本気度のようなものが示された番組だった。

- 能登は「笑顔」が隠れたキーワード。辛い状況、悲しい状況をもっと前面に出して報じることもできたと思うが、それでは未来へ繋げようという気持ち生まれにくい。少しでも前を向こうという姿が映し出されていたところがよかった。

<②「Nスタ 東日本大震災 14年」について>

- 震災遺構・宮城の中浜小学校からのホラン千秋キャスターの中継。震災当時子どもたちが階段を駆け上って屋上に避難した、寒い中毛布を共有しながら暖をとった様子が目に浮かぶようで、大変安定感のあるリポートだった。
- 首都直下地震で想定される同時多発火災の被害について具体的に説明していた。震災は繰り返しやってくるので、将来起き得る災害の備えについて考える契機となった。
- 南海トラフや首都直下地震への備えの必要性が年々高まっている。墨田区・大田区などの災害に対する取り組みを紹介したことは、他の自治体にとって刺激になったのではないか。
- 「これから津波の映像が流れます」と断った後に流す映像の尺がちょっと短いと思った。しっかりアナウンスする前提で、ちゃんと怖がらせてほしい。もうちょっと伝えないとみんな忘れてしまう。その度合いは難しいところだと思うが、今後も議論し、考え続けてほしい。

<両番組全般>

- 能登では1年間、東日本では14年間取材を続けて、メディアとして取材相手との信頼関係がきちんと築けたことが重要だと思う。広い視野から、広い観点を視聴者に見せるという、メディアの意義・機能も感じさせた。
- テレビは「共感のメディア」。人々の生きる姿、頑張る姿を示すことで共感を得て深く問題提起していく、それがテレビの震災報道の1つの大きな意義な

のだと改めて確認した。

- 災害被害を個人的な問題として捉えるのではなく、社会の問題として解決することが求められている。自分事ではない問題をいかに考えるのか、テレビが持つ公正性が率先していかなければ若者や子どもたちの倫理的な思考が育たないのではないかという危機感を感じた。
- 全体的に「男性の記憶」が語られていた。取材が困難だったなどいろんな背景があるかもしれないが、被災地に女性の声が届かないことで起きている問題もあるので、1つくらい「女性の物語」があってもよかった。
- 災害発生時に、社会的少数者にどういう形で情報発信ができるか、どういう形でフォローができるか、過去の災害を振り返るときに取り上げてほしい。TBSにはテレビとラジオがあるので、今後はラジオとの連携にも目を向けて頂くことを期待。

【局からの回答】

- スタッフは、現場の取材で会った人たちから立ち上がる強さのようなものを感じて帰ってきている。能登や3.11だけの話ではなく、人間としての本質的なところとっており、そこはきっちり描いて伝えたいと思っていた。
- 「男性の記憶」のご指摘はおっしゃるとおりだと思った。熊本地震のとき、クリーニング店を一人で営みながら子どもを一人で育てている女性を取材したことがあるが、自分にとっても貴重な経験だった。今回もそういったものが入ればよかった。
- 津波の映像をもっと、というご意見、今回の編集でも悩んだところだった。ご指摘のように、被害の甚大さや恐ろしさをちゃんと伝えていくという意味では、映像にまっすぐ向き合うことも必要なのかなと感じたので、今後生かしていけたらと思う。